

グループ討議による 進路選択のプロセスの研究^{註)}

教育心理学研究室

佐治守夫・近藤邦夫・甲斐隆・飯長喜一郎

A Study of the Process of Career Development with a Method of Group Discussion.

SAJI MORIO・KONDO KUNIO・KAI TAKASHI・IINAGA KIICHIRO

Summary

Eighteen times of group discussion were held for the purpose of clarifying the process of career development of each members of the group who were mainly university undergraduates and graduates. Through the process of discussion, with the help of each members and also with the help of the group process and group dynamics, several environmental factors, personal factors, especially inner core factors of the person and also basic factors underwent fermentation of career development of long time period of life history were realized. We found also there were turning points or critical points where critical change of career development occurred.

Four patterns of career development were identified. These were, patterns of career development basically depending upon external value systems, pattern of career development determined by environmental factors, pattern of career development determined by developing of inner core systems, and pattern of continuing outer and/or inner conflicts through the long range of career development.

Contributing forces of group process and group dynamics to the realizing of process of career development of each person were discussed and several case studies were reported.

〔1〕 研究の概要

註) この研究は、昭和48年～49年度の文部省科学研究所による研究「進路選択と選抜に関する教育心理学的研究」(研究代表者、東大教育学部 肥田野直教授)の一部として行なわれた。われわれの研究の主たるメンバーは、次の通りである。

西村秀夫 (東大教養学部助教授、進路相談室)

佐治守夫 (東大教育学部教授、学生相談所長)

近藤邦夫 (東大学生相談所、助手)

甲斐 隆 (東大学生相談所、助手)

飯長喜一郎 (東大教育学部、教育心理学研究室助手、途中より参加)

なお本校をまとめるに当って、保原美代子(三輪田学園スクールカウンセラー)の助力を得た。

1. 方法と目的

昭和48年11月より、昭和50年3月に至る間、月に1回～2回ほどの頻度で、一回約2時間のグループディスカッションで開催された。参加者は、常時5～6名から7～8名であり、主として任意参加の本学学生・大学院生の他、この研究に関心をもった学外者数名、年令20才～30才台が大半をしめた。

この参加者のほとんどが、東大学生相談所主催の「自己理解の為のグループ合宿」への参加経験をもっており、その点でグループでの話しあい、及び自分を考えることについてはなれている人たちであるといえる。グループディスカッションの目的は、上記のボランティアとして参加したメンバーが、できるだけ自由な雰囲気のも

とに自己を語りながら、それぞれの現在までの、あるいは現在直面している進路選択の過程を、可能な限り明確にとらえてみよう、あるいはとらえなおしてみようとするのであった。このような会は、のべ18回を算え、その間にメンバーの交替もあったが、その展開の様相は後に「グループ討論のプロセスをグループダイナミックス」及び「事例研究」の章においてのべる如くである。

このような趣旨のグループディスカッションであるために、話し合われたことは必ずしも狭義の進路問題に限られなかった。いわば一人一人の今までの生活経験が語られ、その中で個人の私的な生活感情の様々な面もとりあげられた。このようなグループディスカッションによって進路問題を解明するためのどのような結果が生れてくるのかは当初必ずしも参加者にとって明確ではなかったし、現在まとめる段階に至っても、必ずしも明確に指摘しうるものではない。けだし、個人の進路の問題は、大きくその個人の誕生にはじまり、親や同胞の影響、小中高校・大学を通じての、学校のふんいき、友人・教師の影響、その時々さまざまな、個人の生活に影響を与える事件の発生、等々によって規定されるのだろう。グループディスカッションが広い意味でその個人の進路問題に焦点をあわせながらもできるだけ自由なふんいきのもとに、各個人が自らを語る形で行なわれたのは、進路が決定される要因をあらかじめ仮説的に設定してそれについて語ってもらうというやり方ではなく、白紙の状態、一人一人が考える今までの進路がきめられてきた過程はどのようであったか、その過程に影響を与えた要因は何であったかを語ってもらいながら、それを他のグループメンバーと共にたしかめゆく仕方が、有意義だと考えられたからである。

話しあわれたことを更に具体的にのべるならば、次のような諸点にまとめることができるだろう。今までの生活史のそれぞれのクリティカル・ポイントは何であったか、現在の自分にとって、今のぞんでいる進路の方向はいつごろ、どのようにして決定されたと思えるか、過去のそれぞれの時点で、ある進路の方向の選択にふみきらせた要因は何であったか、その要因自体はどのように形成されたと思えるか、等であった。結局の所、このグループは広義の自己探索の意味をもっており、グループカウンセリングの場と同じく、すべてのメンバーが、そこで問題となっている上述の諸点について、現在語っている個人と共に考え、その探索を援助する形をとった。そして、自分の場合はどうであろうかと考えることで、そのテーマが共通にとりくむ課題となったのである。

2. 進路選択に関して共通の認識として明らかになったいくつかの問題点

進路選択、あるいは進路決定（この二つをあわせて career development とよぼう）に影響すると思われるさまざまな内容、あるいは、進路を考えるにあたっての個人のさまざまな態度の明細化・明確化は、グループ討議の当初から進んだわけではない。最初は断片的な事実が脈絡なく語られるといった手さぐりの状態から初まり、回を重ねるにつれて、career development において中心的事実と考えられる諸点が、少しずつ明らかになってきたのである。以下問題点のいくつかをとりあげたい。

1) Career development を考えるに当たって、具体的な進学にあたっての「学校の選択」「文科方面か理科方面かの選択」あるいは、「職業選択」などに直接焦点をあわせるのは、問題の本質に迫るうえで適切ではない。このような具体的なテーマは、個人の career development の過程の中の顕現的な部分のしかもごく一部であるにすぎない。たしかに具体的な選択行動を明らかに示している点で、最初の探索の手がかりになりうるし、その当の個人にとっては現在直接的にあらわれた結果として重大な事実ではある。しかしこれらの顕現的過程の背景に、その具体的選択に影響を与え、それを決定せしめている潜在的で、本人にもふつうは殆んど気づかれていない要因がある。

それはたとえば、「個人内の価値体系の発展」「選択のものをも、その一部分として包みこんでしまう、個人の生活感情を支える精神的風土、土壌」「家庭や親子関係のあり方」などと呼ばれるものである。当然のこととして career development は、人格形成・人格発展の過程の一つの側面としてとらえるのであり、それを無視して考えることはできない。

2) 幼時よりのある程度一貫している進路選択の核になる要因、たとえば気分、傾向、選択に際して、その個人をしてそれ以外のものではなくて、まさしくそれをえらばせるものなどがある。核とはその個人の、かなり以前の過去より、一貫した生活感情として流れているものである。それは主として潜在的に、そして場合によってその要因が明確に浮び上ってくる特定の状況の下では顕現的に、他の様々な要因とからみあって、実際の選択行動を決定する。それはその個人の根本的な「要求」「もとめ」であり、基本的な欠如感とよんでもよく、その個人をある方向におしすすめる必然的な何かでもある。核的要因はこのように、個人の進路選択のうえで影響する主流となり、また主流として表出しなくても、他の要

因に働きかけて一つの選択の方因を決定する力をもっていると考えられる。

なお、この核的要因が明確に意識されることがあるとすれば、その時期は、大学生活を経験した人たちにとっては、大学生活の半ば以後（教養課程を終る前後）であることが多いようである。

3) Career development における critical point (あるいは turning point) とよぶべきある時期がある。この時期は、今まで必らずしも明確でなかった進路問題が、その問いかけを個人に強烈に促がす時期である。この critical point (あるいは turning point) にあっては、少なくとも意識的には主として外的要因による選択がなされていたそれ以前と比較して、その際の選択が自己内部の価値体系と結びつくという経験を伴っており今までとは明らかに選択の方向がちがっているという特徴がある。この critical point と上述の核となる要因が意識される時期との関係は、後者（核要因の意識）の方がおくれてあらわれることが多いようである。critical point はその際の進路選択の決定と直接結びついて、時間的 perspective において、比較的狭い範囲で生ずるのに対して、核的要因の意識の形成には多くの時間を要する。当然のこととして、career development は人格形成・発展の過程の一つの側面としてとらえるのであり、それを無視することはできない。

4) 幼時よりある程度一貫している進路選択の核になる要因、たとえば、「気分」「傾向」「選択に際して、その個人をしてそれ以外のものではなくて、まさしくそれをえらばせるもの」などとよべるものがある。核的要因とは、個人のかかなり以前から、一貫した生活感情として流れているものである。それは主として潜在的に、(そして場合によって、その核的要因が顕在化してくる場合にはかなり意識的に、(様々な他の要因とからみあって、) 実際の選択行動を決定する。意識化される場合には、核的要因は「個人の根源的な要求、もとめ」であり、基本的な欠如感とよんでもよい。このようなもとめが個人を必然的にある方向におしすすめる。例をあげていうなら、「自分の存在の不確かさをどこかで感じつづけており、それを埋めるために……意識することはなかったが……いろいろの模索をつづけてきたようだ。最後に辿りついた、現在の福祉の仕事も、その自分らしいもとめになっっている」という場合、自分の存在をしかめようという「基底感情」が、ここでいう核的要因にあたる。核的要因はこのように、進路選択に影響する主流であり、他の要因に働きかけて一つの方向を決定する力となっている。

なお、この核的要因がかかなり明確に意識されることがあるとすれば、その時期は、大学生活を経験した人にとっては、大学生活の半ば頃（教養課程を終る前後）であることが多いようである。

5) 3でのべたこととやや重複するが、critical point での選択は、比較的短い時間の経過で生ずるのに対して、核要因の意識は、その選択の際の価値意識や「もとめ」にとどまらず、かなり以前にさかのぼってその源流をさぐりうるのである。そしてこの生活史全体に流れる一定の方向づけは、実際の具体的選択が行なわれた際、あるいは、それを行いながら少しずつ明確になってあらわれてくるようである。これは、個人の生活史の上でのあらわれ方の順序であると同時に、グループディスカッションの過程でもおおよそ類似の時間的経過で問題にされた。すなわち、critical point についての話題が時間的に先にあらわれ、核的要因について回想、あるいは個人内のたしかめは、その後話題となったのである。

われわれのグループでの経験では進路に関する critical point のあらわれる時期は、高校の終り近くから大学生活の終り近くにかけてであるらしい。発達的にみても、この時期は外界の現実についての認識と、自己の内部の要求とがかかなり分化した形がとらえられ、両面への関心がバランスをとって発展する。この時期に career development の上で、どのような変化があったか、今までとはちがうどのような選択をしようとしたか、実際の選択はどうであったかを知ることで、その後の進路選択の意味や、進路にかかわるその個人の考えが、かなり明瞭にとらえることが多い。

6) 核的要因及び critical point における選択の様相を検討してゆくと、その個人を生活史的にさらに以前に溯って検討することができるようになる。この際、主観的・意識的事象としての進路選択にかかわるものとしての上述の諸要因の他に、本人の意識に明らかに影響を与えたり、あるいは意識的には十分に統合されてはいないが、その個人の career Development に實際上影響を与えたと思われる外的な事実・外的な要因をえらびだすことができる。それは例えば、家族内の大きな事件（両親や同胞の身におきた様々な事件、親子関係の変化など）、経済上の変化個人にとって、重要な意味をもつ他人（知人・教師・友人・親戚）等からの影響、アルバイトその他による現実の認識など……種々様々である。

そしてこの外面的な諸事象は、長年の経験として一部は career Development における核的要因の形成にあづかっている場合もあるし、反対に核的要因に対立し抵抗するものとして意識されている場合もある。このような

関連のあり方は、グループ討議の過程で、各個人に即した形で検討されたのである。

7) 4でのべたことは次のような観点から整理しなおすことが可能であろう。その際の観点は、上述の歴史的・時間的過程を抽象して、それぞれの時点での個人の進路行動に限定した観点である。そのようにみるなら、進路行動も一般の心理学的行動と同様に理解できる。すなわち、個人的の主観的価値体系（核となる要因を背景にもち、クリティカルポイントでの行動をある程度意識的に支えるもの）、あるいはより一般的に社会的欲求の実現をめざす目標行動と、その行動を妨害したり支えたりする外的事象（Murray, H. のいう圧力……press）との相互作用とみるととができる。ただし進路行動においては、この支持しあるいは妨害する外的事象といっても、多くの場合根深い歴史的（生活史的）意味をになっているものがほとんどであることに注目すべきであろう。これは価値体系の成立の過程ですでにのべたことでもある。

そして、この欲求—圧力の相互関係が、何らかの折衷・おりあいを経て、現在の選択にすすんでいる場合には、積極的な選択とも受動的なそれとも異なる「選択との運命的な出あい」とでもよぶのがふさわしい体験となる。事実もし「健康な選択」とでもよべるものがあるとすれば、この、いわば機が熟して、無理のない「開け」（unfolding）にもとづく選択なのであろう。

しかしより普通には、何らかの外的圧力によるやむをえぬ受身の選択になったり、自分の価値体系の顕現のための強引な主張であったりして、葛藤をのこしたままの不満な選択としてうけとられているようである。

8) 先にとりあげた個人内の要因と外的な要因という区別も、あまり明確とはいいきれない。個人内の要因として、その個人が内在化して構成した価値体系をあげたが、この価値体系が内在化する過程を考えると、最初は、社会的・習慣的に確立されたかにみえるものが、少しずつ個人によってとり入れられ消化されてくる過程がある。それ故、価値体系といっても、むしろ外在的に自己からはなれて存在しているものを、選択の際に借りてくる場合と、自分の内的世界を貫く論理や倫理感に支えられた体系との両者がある。そしてある場合には、疑問なしに外在的体系にもとづいた選択がなされ、一見安定しているかに思われることが、事実存在するのである。そしてこのような場合には Career Development は前述の核的要因との関連が明確に意識されることのないままに進んでいるとの印象をうける。そしてこのような選択が常に後への葛藤を残すものだともいいきれない。特に核的要因が問題にならないと思われる個人、自らそのよ

うに言明している個人にあっては、外在的価値体系が具体的かつ明確に存在していて、それについて疑いをさしはさむ余地すらない。いわゆる立身出世型とか、ある仕事の領域の予じめきまっている家族の中に育っているような場合は、その外在的価値体系をそのまま受け入れる内的体制が幼時より強固につくりあげられてしまっているのだと考えられる。

しかし普通には、外在的体系を、自分の価値体系とつきあわせて、意識的に葛藤をよびおこしている場合の方が多い。

9) Career development を考える際に、既に、3、及び4、においてのべた、核的要因が、高校から大学にかけて生ずる critical point での新たな選択に際して、どのように影響するのかを構造的に問題にすることができる。（3及び4においてのべたことは、その発生的関連についてであった。）ある人にとって、以前からこだわり続けてきた内的な核的要因が、この critical point においても一貫して守り続けられる。第2の場合には、核的要因は切りすてられ、その他の条件（主として外在的要因……時に外在する価値体系）によって選択がうごかされる。第3の場合は、新しい選択に当たって核的要因にこだわりながらも、それが一貫できずに、葛藤の多いままに残される。

さらに、もう一つの展開が考えられる。今まで核的要因とよばれていたものが、前にのべた「運命的な選択との出あい」ともよぶべき自然な流動を通じて、極端なこだわりや、その核がぎこちない「守らるべきもの」とか、個人にとって「どうしても貫ぬかれるべきもの」といった色彩を脱してくる時期がある。それは、単純に外的要因と内的価値観とが折合をえていると以前にのべた場合のような、葛藤の解決としての選択の結果そうなるのではないようだ。また、新たな critical point での選択の結果そのように発展するということでもない。少し大きな表現をするならむしろ個人が自らの使命観とか、自らが当然やるべきあるいはやりたい領域についての認知と、以前からの生活感情とが融合しあうような体験であるようだ。いわば新しい選択によって、核的要因が全く自然にその選択の中に吸収されていく過程であるといえそうである。外から観察したとき、「ああやっぱりあの人はあの人にあった領域をえらんでいるな、本当に自然でぴったりあった生き方だな」という感想をもたせる場合なのであろう。

3. 選択における核的要因の分析

以上明らかにしてきた問題点をふまえながら、グループ討議の場で明らかになってきた、それぞれの個人が進路選択にかかわる中核的要因（時にはその個人の生活を一貫して流れる「生活感情」、「生活風土」「もとめ」「基本的欠如感」などとよんでもよい）についてまとめてみる。

以下10名についてのべるが、グループ討議には多数回参加してある程度充分な資料がえられた個人についての記述に限ることとした。この10名の中にも資料の精粗の差があるのだが、その点はあえて問題にしないこととした。

個人記号 [A]

〔核的要因〕 ①外在的な価値・目標の系列の中から、意味があり価値あるとされている困難な目標をえらぶ。上昇志向的気分。②自己完結的な生き方・破綻することの恐れ。

〔外的附加的要因〕 教師のすすめで、理科の領域をえらぶ。

個人記号 [F]

〔核的要因〕 ①力への意識と、法則的・規則的世界を求める気分。②そのような方向の中での他人への援助を実現したいと思う。

〔外的附加的要因〕 母の希望にしたがう。

個人記号 [K]

〔核的要因〕 ①今の自分は真の自分ではなく、偽りの自分ではないかという漠然とした感じ。真の自分を求めたいと思い、他人との関係の中で自己回復をねがう。②自己の内面への探索と、人間関係をもつ願いとの両立を求める。

〔外的附加的要因〕 父との両価値感情的関係が以前は強かったが、近年親しい暖い感じをもちはじめ。ロマ・ン・ラン、斉藤喜博などの影響をつよくうける。

個人記号 [L]

〔核的要因〕 ①他人にとって意味のある存在でありたい。②孤独に見棄てられることへの不安がつよかった。親からうけた傷手を回復する方向への求め。③動物・植物などを育てることへの関心。医学・健康などに関連するイメージの実現へ。

〔外的附加的要因〕 父に対する恐怖感情がつよかった。母のすすめで教師への道をえらび、その後臨床や福祉の

道に近づく。

個人記号 [J]

〔核的要因〕 ①支配・力の意識におけるある喜びと同時に、他人に配慮し世話することでの満足感をもとめる。②現実的な処理が巧みである自分であるが、それのみでは不満足である。社会主義的考えへの親近感。

〔外的附加的要因〕 他人の世話を喜んでする母親の影響をうける。

個人記号 [H]

〔核的要因〕 ①抽象・非現実的世界から現実界への方角を求めつづける。非現実と現実とのバランスを求める。その一方で現実接近の恐れ。やわらかさや親密さを求めながらそれを恐れる。②聖と俗のそれぞれに対する Ambivalency の感情。

〔外的附加的要因〕 一人っ子であること、父との両価値感情体験。障害者との接近。

個人記号 [G]

〔核的要因〕 ①身のおき場所がどこにもない、圧殺されそうな自分を保とうとする努力、そのような状況から逃げだして何かに帰属することで安心したい感じ。②何とか自分が自分として生きつづけた願い。

〔外的附加的要因〕 理想主義的な父、父に対抗する母の両者の間での不安な経験、資格試験の失敗、障害者とのあい。

個人記号 [I]

〔核的要因〕 ①自分の存在の不安定さ、わけの分らなさを感じつづけており、少しでも自分の存在を肯定したい、人からうけ入れられたいと願う。②恵れない人への関心が強く、不平等・不公平への怒りを感じていた。人間そのものへの探究への関心。

〔外的附加的要因〕 大家族の中で育つ。父への接近と反撥。父の医療の仕事に影響をうける。社会的混乱の時代に育つ。

個人記号 [M]

〔核的要因〕 ①孤立的な生活感情をもちつづける。他人と接近することの恐れ。一方で他人と接近したい感情がつよい。現実的な接近による満足感の体験 ②他からの強制への反撥、強い自己主張がある。一方でそのような自己への嫌悪感がつよかった。

〔外的附加的要因〕 研究者になることを支持する、家

族や親戚。

個人記号 [E]

〔核的要因〕 ①自立できること、家族から離れて、自らの手で生活することを願う。②他人を世話し援助すること、病者をたすけることを望む。

〔外的附加的要因〕 ①父母の不和、母に対する同情と家族からはなれたい願い。家族の経済的条件。

以上が、10名の進路にかかわる核的要因を中心とする簡単なスケッチである。この中で[A]、[G]、[I]、[L]の4名については、後に「事例研究」の章でやや詳細にふれる。

ここでは、この10名にみられる進路選択の特徴的なパターンを考察することとする。

（パターン I）：[A]及び[E]に典型的にあらわれる型である。内的な求めや、基本的な欠如感にもとづく選択は、少くとも主流をなしていない。彼らの意識にあっては、いくつかある外的な選択肢、外在する目標のうちのどれをえらぶかが選択の意味する所である。それ故、時に上昇志向的となり、外から「価値あるものだといわれたもの」が選択の目標となる。〔外在価値志向型〕といえる。（[A]にあっては、このグループ討論のプロセスを通じて、自らのこのような態度に新らしく目を向け初め、内面的な価値の意味を感じ初めて行った。）

（パターン 2）：典型的には[E]にみられる型であり、パターンIで「外在的な目標のうちどれをえらぶか」が問題であったのに対して、目標の価値も勿論重大ではあるが、基本的に家族の経済条件といったさしせまった外的要因が、それにあった目標を選択させる型である。我々のグループには存在しなかった例だが、家業を営んでいた父の急死によって、やむをえずその仕事をひきつぐことになる場合などもそれにあたると思われる。〔外的条件型〕ともよべるであろう。ただ[E]の場合、看護婦を志向しているのだが、外的条件が優先するとはいっても、他人への援助を自らの核的要因として明確に持っているのであり、核的要因の存在が現実の選択に大きなかわりをもっていることは明確なのである。

（パターン 3）：[K]及び[L]に典型がみられる。〔核的要因型〕とよべるものであり Critical point を経て、明確に自己の選択が内的核的要因によっていることが意識され、その方向が年月のたつと共に明らかになっていくパターンである。〔核的要因型〕といっても、当然多くの外的要因がその選択にあたっては参与しているのだが、

それらの外的要因が、核的要因にはっきりと収斂してゆく形態がみられる特徴がある。

〔パターン 4〕：[I]及び[G]において特徴的な型である。内的核的要因そのものが葛藤や混乱を内在している場合、核的要因と外的要因とが相互に葛藤をよびおこす場合など様々な形態があるが、基本的に、ある選択や決定が、その時々新たな葛藤をよびおこし、多少の差はあっても、決定後の不安定が著しくみられる。〔葛藤型〕とよべるものである。

その他の個人は、これらの典型例のいくつかを同時にもっている。たとえば[M]は、〔葛藤型〕と〔核的要因型〕の混合である如くである。

以上の型わけは、暫定的なものにすぎない。今後の資料の整備をまわって、より適切なものに修正できるであろうし、因子分析的手法などによる分類も将来可能であることを予想している。

（以下のグループ力学、プロセス、事例の検討は、グループ討論の実際レコードされた記録をふまえての分析である。）

〔2〕 グループ討論のプロセスとダイナミックス

1. グループ討論のプロセス

本節の目的は、「グループ討論参加者個々の進路選択をめぐる経験を率直に出し合う中から、進路選択に効いてくる諸要因や問題点を具体的に浮き彫りにしていってみよう」ということで始まったグループ討論の、展開と深化のプロセスを記述することである。我々がここにわざわざ一節を設けてグループ討論のプロセスに触れるのは、前章に述べたような諸知見は、まさにグループ討論そのものの深化とメンバー間の相互作用の深まりの中で自づと姿を現わしてきたものであって、それと切り離しては語りえないと考えたからである。

グループ討論のプロセスは、便宜的に第1期～第5期に分けて捉えることができるだろう。

〔第1期〕は、グループ討論の第1回～第2回の期間を含んでいる。この時期の我々の関心の焦点は、主として高校から大学へ進学する時期（あるいは教養課程から専門課程へ進学する時期）での進路選択（具体的には学科の選択）に絞られ、その選択に影響を及ぼした主として外的な要因を個々に探索し述べ合っていた（内面的な要因が語られても、それはあくまでもこの時期の選択に直

接関係するものだけであったと言えるだろう)。羅列的に挙げれば、それは次のようなものであった。

- (1) 父親の職業、親の期待、親の職業観（人生観）からの影響
- (2) (小、中、高)の教師の影響
- (3) 友人の影響
- (4) リンカーンとかアインシュタイン等の偉人への憧れに基づく漠然とした方向性
- (5) 理系一文系を決める際の(高校時代までの)学科の得意・不得意
- (6) 自分が漠然と進みたいと思う方向のモデルになるような具体的人物が身近かに在ったか否か。
- (7) 経済的要因(例:家庭の経済的事情で高校卒ですぐ就職しなければならなかった。国立大学には行けても私立大学には行けなかった。)
- (8) 書物の影響
- (9) 漠然とした内的欲求(例:ある学科に属したが何か充たされなかった、物足りなかった。人間に直接かかわることがしたかった。)
- (10) 能力の問題(例:本当は歴史学をしたかったが、とてもそこで創造性を発揮するだけの能力は自分には無いと思ってやめた)
- (11) 男女差の問題(例:結婚による状況の変化。「それで食っていけるか」というような将来の職業選択の切実感の有無。)

このように、時間的視野が大学での専門学科選択という時点に縛られ、そこに働いてくる個々の外的要因といういわばアウトラインを探ることが第1期の基本的特徴であった。メンバーの間には、そこに提出された様々な外的要因を自分自身に当てはめてみて、自分にとってはどうであったかという観点から考えていくという淡いインターアクションが認められる。いわば、つき詰めて進路選択をめぐるの自分と他のメンバーとの共通性や異質性を確認し合うところまで行かず、相異は相異としてパラレルに共存し合うような形にとどまっているのだが、一方では、メンバーの進路選択の中に共通に姿を現わしていた「教師」(特に高校段階)が各々に種々のレベルで大きな影響を与えているのではないかという共通の認識に近いものもあって、そうした個々のファクターがどのような影響を及ぼしているかを確かめていく中で、進路選択の様相を明らかにしていこうという意識がメンバーの中に強く働いていた。

〔第2期〕(3回～6回)は、進路選択に対するこうした要素的な迫り方をGがきっぱりと拒否することから始

まった。「君にとって教師の影響というのはどういうものだったろう」という問いに対して、彼の答はこうだった。「教師とか友人とかその他の外側からの影響を受け容れる余裕など自分にはまったくなかった。むしろ小さい頃からとてつもない大きさをもった両親の間で全く潰されつづけ、なんとか自分の居場所を見つけようと自分自身の世界の中だけのあがきで精一杯だった」。彼にとっては、そのあがきが、或る時は、ドロドロした人間臭を一切捨象した理論的体系的な硬質な世界へ逃避させたり、そこでも息をつけずに子供との接触という人間的な世界へ戻ってきたり、という形で彼の進路を基本的に方向づけてきたものだった。外側に形となって現われてきた選択はその時々で姿を異にしても、その底に流れている求めは一貫しているということで、あるメンバーはそれを彼の“basic tone”と呼んだ。彼の発言のインパクトは大きく2時間あまりをひとりで語り読めた彼の心の苦渋は他のメンバーに強烈な印象を与えた。Kは4回目にその観点を引き継ぎ、小学校以前より「今の自分は本当の自分ではない。偽りの自分ではないのか」という意識があり、それをひとつの原動力として「真の自分を求めたい、他人との関係の中で本当の自分を回復したい」という思いが一貫してあり、それを中心にして、高校時代の激しい価値の転換、モンテーニュ(フランス思想)への憧れ、大学後期での心理学への転向などを語った。

Gによって引き起こされたこの動きは、第1期で皆が抱いていた進路選択のイメージをぶちこわし、むしろ独り独りがもつ“生きざま”といったものを露わにしはじめ、それ以後のグループ・セッションは1回1回が“誰タアワー”と呼ばれたように、個々のファクターよりもひとりひとりの個人の内面に深く目を向けるようになっていった。時間的視野は当然、高校時代以前に溯り、幼児期から詳しく語られるようになった。GやKの話の中に現われてきたような、自分を一貫してつき動してきた流れともいべきものは(“basic tone”と呼ばれたものは)、後に進路選択の基底に流れる人格的な“核”(core)という概念に結晶していったのだが、ただこの時期の我々の中ではそれは未だ漠然とした感覚にとどまっていた、一部のメンバーには“進路選択という問題が果してそこまで深く内的世界と繋がっているものなのだろうか?”という疑念と異和感を抱かせてもいた。

この時期に萌芽として出され後に重要な概念に結晶していったもうひとつのものは、MとNによって示された“将来の方向をおおまかに決定づけた何か”という観点だったろう。2人は、大学での専門学科の選択に影響した個的要因という微視的な見方をとらず、むしろ“大学

へ行って、学問の世界へ入って行く”とか“人との関係の中で働く”とかいう大まかな方向性が、幼児期の環境(父母を含む周囲の人間の期待や考え方)や児童期の諸経験(長男であること、教師とのめぐり合い、団体生活)などの全体的布置の中で暗々裡に指し示されていたことを述べた。そこに取り上げた要因そのものは、外的要因という色彩を濃く帯びていたにしても、時間的視野を幼児期まで溯らせ、より大きな枠組での方向性という視点を提示した点で、それは後に“土壌”という概念に結晶していく萌芽であったと思われる。

これに続く〔第3期〕(7×~10×)は、表面的に見れば“中だるみ”とも言える時期で、メンバーは、自分の動きを強く縛りつけている“先生意識”(M)とか、自分の内的空虚感を埋めるための根強い“スター意識”(B)といった、自分自身の現在の関心事とか迷いという、いわば進路選択とは殆んど関係のないことを互いに自由に語り合っていた。

G, H, K, などによって提起された、進路選択の底に流れるかなり深い内面的苦闘の話に刺激されて、メンバーは進路選択という枠の中だけで自分を語ることがどうにも窮屈になり、その枠をかなぐり捨てて率直に自分の内面そのものを他のメンバーの中に投げ出していった。メンバーの間に、そうした話を出していても受けとめてもらえるという一種の信頼感が出てきたからでもあるが、今から考えてみれば、この時期に育まれた、この信頼感と、それに裏づけられた(外的な進路選択という枠に縛られぬ)自由な発想と深い内面への探索がなければ、後に見られるようなグループの展開はありえなかったのではないかとも思われる。

この時期を特徴づけるメンバー間のインタラクションのあり方を考えてみると、第2期のそれが、ひとりひとりのメンバーのこれまでの進路選択の経路とその底にある内面的葛藤の話に——それはそれなりのある完結性をもっていたので——皆がじっと耳を傾けて聞くというものであったのに対し、この時期の特徴は、個々人が現在かかえている未解決の内面的葛藤を皆の前に投げ出し、一緒に考えて欲しいと訴え、それに向って皆が各々の視点から全力投球をしたことだろう。その意味でこの時期は、まさにインタラクションと言えるものが生まれてきた時期でもあった。

第4期(11回~14回)は、第3期に暗に育ぐまれていたものが満を待していたように、くっきりとした言葉となって吹き出てきた時期であった。この時期に入る直前に、メンバーは進路選択の決定因を探る暫定的な整理

案を渡されていた。それは、直接的外的条件(地域近隣社会の影響、家庭内の雰囲気、父母の職業観、意味ある他人の影響)、学校・教師の影響、個人的条件(知的・身体的条件、興味・関心のあり方)、自己の望む方向イメージとその実現に関わる問題等の領域を、小学校入学前、小学時代、中学時代、高校時代、大学前期、大学後期、それ以後、の時間的区分に従って分け、各々の時期に各々の領域の中で、自分の進路選択に影響を及ぼすものとしてどのようなことがあったかを整理するものであった。11回はその整理表を全員が記入してきたうえで、それについての感想を述べることから始まった。その中で最も重要な指摘は、“この表ではどうも自分自身を表現しにくい、今までの人生を振り返ってみると、その間の様々な選択の底に、小さい頃から自分の中で苦しみ追い求め、温めつづけてきた“核”(core)のようなものがある、それを解消したり克服したり或いはそれと手を結んだりという形で個々の外的選択が現われてきているようだ。その核そのものと、その核をとるべく内的外的条件との相互作用を——それが自分にとって中心的なテーマなのだが——この表では表わせない”というものであった。“核”なるものは例えばLにとっては、小さい頃から心の底にある“ひとりぼっち”という感じで、それを癒し心のつながる相手をもちたいというところから“動植物を育てる”という関心が芽生え(小学校時代)、それが“法律で人を救う”(中学時代)とか“教師”(高校時代)とか“人の世話をする”という方向に発展し、やがて障害児の治療教育に繋がっていく経路を辿るのである。各人の心の底には、このように既に小さな頃から現在に到るまで、見え隠れしながらいわば通奏低音のように一貫して流れている何ものかがあって、それは成長し年を経るにつれて様々に姿を変えてはくるが、しかしその変容の仕方は、螺旋状階段のようなもので、どうもその中心はあまり変らないらしい。個々の進路選択は、その中心を貫ぬく“核”との関係の中で陰に陽に決定されているようだ、というのが、G, K, L, などの感じ方であった。それに対してBやHから反論が出される。「“核”といっても分らない。自分を捉える視点というなら分るけど」(B)、「“核”と言われても困る。僕にはそれがない。外的な進路と内的な進路が、僕の場合には交らずに、別々のものとしてパラレルにあるのだから」(H)。両者の討論が進むうちに、次のことが明確になってくる。Bにとっては、G, K, L, などとの対比から、そういうもの(核)の無い自分、いつも人の言動に左右されて動いてきた自分の姿が見えてくる。Hに対しては、“男らしい男になりたいという四苦八苦が君の核ではないのか”、

“なんとか普通の人間の仲間入りをしたいということが、いつも君の動きの底に流れていたように思う”と他のメンバーからの指摘が出されるが、しかし、彼はむしろG、K、L、などと違うところにいる自分、進路選択に直接つながるような形で内的苦闘がないことを自分のあり方として捉える視点を譲ろうとはせずに、後に述べるような“大きな選択”における外的条件と内的な“核”との出会い方の差として自分の個性を位置づけていったのである。

この討論の中で浮かび上ってきた第2の点は、「それでは、その“核”なるものが直接的に外在的なものと結びついていったのはいつ頃なのだろうか？」というMの疑問をめぐる討論から分ってきたことであった。

どの人の中にも高校から大学にかけて大きな曲り角があるらしい。商社マン志望→学者志望、上昇志向→自己実現志向、政治家志望→内面への志向……等、ある意味できわめて決定的な変換を各々がこの時期に遂げているのである。この時期以前の我々はほとんど外的条件（又は圧力）によって進路を決めてきたのが、この時期に初めて自分で自分の進路を主体的に選択する。そしてこの時に初めて我々は、自分自身の“核”に意識的に出会い、それを外的条件（又は外的進路）にどう融和させあるいは両者をどう統合するかを迫られるのである。我々はこの時期を“turning point”とか“critical point”と呼び、その時期に行われる選択が他の時期に行われるそれよりも遙かに大きな（ある意味で決定的な）比重をもつところから、それを“大きな選択”と呼んでいた。そして個々人の個性や生き方の差が、この時期のこの選択の中で、内的な“核”と外的条件の両者をどう折り合わせるかの差（例えば、内的な“核”にまつわるドロドロした何かを切り捨てて、すっきりした外的条件の方に自分を嵌め込んでいくか、あるいは外的条件を無視して内的な“核”に固執するか、あるいは両者の間で態度を決め切れずに揺れ動いていくか等の差）として現われてくるのではないかと、という指摘が（前にも述べたように）Hからなされたのであった。

“核”とか“大きな選択”とか“turning point (critical point)”という重要な概念は、このように、メンバーが自分の考えを出し合い、確かめ合い、深め合う中で創造されてきたものであった。この時期のその後の展開は、Mのまとめを借りれば、「ある時期まで溯ぼって、自分を基本的に動かしてきたと思われるこだわりのようなもの（“核”）と、それが外在的なものに出会う大きな転換期（turning point）を各々に明らかにしてみよう」ということで、各メンバーが自分の“核”らしきものを探り、

転換の質を探るなかで、各人の個性が浮き彫りにされてきたのである（そこで明らかになった各メンバーのあり方は、前章で詳しく触れてあるので、ここでは省略する）。

第5期（15回～18回）を彩る中心的な概念は“土壌”というものだった。各々のメンバーが自分の中に探っていった核的要因は、“よりどころがない”とか“本当の自分ではない”とか“ひとりぼっち”というように多かれ少かれそれに向って何かを埋め合わせていかねばならぬ或る欠如感として現われてきていたが、その核がどのようなところから生れてきて、それを自分がどのように感覚的に感じとり、それにどう対処してきたかを考え始めた時、メンバーは最も実感にフィットする言葉として（Lの言い出した）“土壌”という言葉を使い始めていた。この言葉を正確に定義することは非常に難しいのだが、例えばGは、とてつもない大きさをもった両親の間で翻弄され、自分なりの居場所をもち得ずに、まさに“よりどころのない”感情の中で辛酸をなめてきた自分の世界を“酸性の土壌”と表現した。ホッと安らぎを得られる場所を得たい、人の（あるいは自分自身の）温かさを感じたいと思いつつも、それがなかなか自分の中に根を下ろさないということもその表現の中には含まれているのだろう。“ひとりぼっち”という感情を自分の核的感情と捉えてきたLが、そうした感情を育くんだ親や兄弟との関係を省みつつ、自分の世界を寒性とか乾性土壌と捉えて、そこに温かみを潤いを、あるいはそうした土質の中和を願うという時に、やはり土壌という表現がもっともピッタリするように思われるのである。強いて定義すれば、それは、その人の“核”を醸成しそれを包みこむ、感情的色彩に彩どられた内的一相貌の世界とでも言えようか。メンバーは恐らくそこに次の3つの感覚を、ひとつは、“核”というようなひとつの塊といった感覚ではなく、好むと好まざるとに拘わらず自分の存在の基盤がそういうものとしてあり、好むと好まざるとに拘わらず、その上に立って生きざるをえないという感覚を、ひとつは、幼児期からの家族関係の様々な感情的経験がその存在基盤の中に抜き難く込みこんでひとつの感情的質を附与しているという感覚を、ひとつはそうした基盤が必然的な運命として自分に与えられているという感覚を、土壌という表現の中に託したかったのだろう。最後の3回にG、I、L、によって再度深く語られ直した進路選択の経路は、この土壌という概念を基盤にして、このグループ討論の最初に出てきた外的要因も全て統合した形で深く語られたものであった（その一端は次章の「事例研究」に述べられている）。

グループ討論の流れ全体を俯瞰すると次のようにまと

めることができるだろう。最初は、進路選択を規定する外的要因を要因別に挙げていくことから始まり、次にそうした要素的な考え方が壊されて、いわば個人の内面的な“生きざま”ともいべきものの現われとしての進路選択という考えが示され、それは進路選択という枠そのものを外した自由な内面の開陳へと進み、さらにその内面への志向は“核”という概念によって極点に達し、その後には内的な“核”と外在的条件の相互作用という発想を経て、最初に示されたような外的要因が再び陽の目を浴びて内的な“核”と深く統合された形で語られたのである。

2. グループのダイナミックス

前節でも述べられているように、グループ討論のプロセスを通して、各々のメンバーの進路選択のあり方と、それに効いている要因とを意識的に明らかにして行こうとするとき、それを促すものがグループのプロセスの中で働いていたのである。換言すれば、グループの展開を促し、促進するダイナミックスといってもよいであろう。このグループ・ダイナミックスの内、メンバー間のインタラクションについては、既に前節で、グループの展開を促し、何ものかを生み出していったものとして述べられている。

従って、ここでは、メンバー間で facilitate し合ったものという観点からグループのダイナミックスを再度考えてみたい。そして、この促進し合うという力の源になったのは、本質的には、自分とか、自分の進路選択のあり様というものが、他のメンバーとの比較を通して露わになってくるという、いわば対比的な自己認識というものであったのではあるまいか。そこで、それを幾つかの観点から検討するのがここでの目的である。

① 共通性と異質性の確認

メンバーが、セッションの中で各々自分の進路選択の歩みやあり方を語るとき、又その中で重みを持つと主観的に意識されている要因なりに触れて行くとき、それを受け取める他のメンバーは、自分と対比的に考えたり、了解したり、場合によっては異和感を感じたりするものである。換言すれば、自分というフィルターを通して自分との共通性や異質性をメンバー同士が確認し合うという動きでもある。それはグループのプロセスとそこでのインタラクションの質や量とも深く絡み合っており、従って、グループプロセスの初期にはインタラクションの量も少なく、はっきりした対比的な見え方と、それを現わす表現は殆んど出てこないし、たとえ出て来たとして

も、確認し合うという様なインタラクションを伴った深め方は出てこない。つまり、“自分とは違うな”と感じとられても、その相違がそのまま出されるだけで、それらは一体どこが違うのか、その由って来たところとはどこなのかというように、メンバー間で深められることなく parallel なままで出し合う形をとっている。

1回目のセッションで、メンバーAとCの間で次のようなやりとりがあった。現在の専門を選択する根拠として、Aは「自分にとって興味のもてる、おもしろいということ、先ずそれをうけ入れるレディネスがなければならぬ」とより個人的なレベルでの動機を重視すると、Cは「そういう選択のしかたは、自分にとって納得のいく理由づけ、意味づけにはならない。これでよかったという救いにはならない。特に大学闘争との出あいを通じて、何のためにそれをやるのか、その専門の社会的意味や社会的機能というような視点を常に意識している」と、社会的視点が選択の際の大きなポイントであることを強調する。しかしこのやりとりの中では、それぞれの選択の根拠に対する同調的な動きはあっても、相違は相違のまま、そのまま深まって行かず、進路選択への認識の深まりはおきてこない。他のメンバーと自己との対比という作業を通じて、自己及び自己の進路選択、さらには進路問題そのものに対する認識の深化が極めて明確に現われてくるのは、11回目のセッションまで待たねばならないのである。10回目のセッション迄は、いふなれば、自分と他のメンバーとの共通性及び異質性が漠然とながら感じとられ、それがより意識的に明確になってくるまでの醸成期間（乃至潜伏期間）だったとも言えるのである。

11回目の session で先ず、各々のメンバーの“core”(核的要因)の有無及びその内容についてメンバー間で自由なやりとりが行なわれる。即ち、Lの「自分の中で追い求めているもの、温ため続けているもの」: Kの「自分の基本的な流れ」、G&Kの「小さい頃から、ずっとこだわってきたもの」という核的要因が存在するのではないだろうかという認識とHの「外的な進路と内的な進路が別のものとして parallel にある。それが相互につながらない、coreと言われても困る。僕にはそれが無い。そこが違う」及びBの「core というのが分らない。人の言動に動かされやすい自分という、自分を把える視点としてなら分る」というやりとりをして、core みたいなものの存在をめぐって、各々のメンバーの進路選択の把え方の認識が対比的に出されてくる。

そして、このことは、進路選択にかかわる core みたいなものが、各々にあるのか、あるとしたら、それはど

ういう内容を含むものなのか、更にこうした core は外的な進路選択とどのように結びつくのか、そしてその結びつく時期 (critical point & turning point) は何時なのかという観点から、各々のメンバーのいわば個性とかその人らしさが、対比的にクローズアップされるという形で深められていったのである。

② 自己認識の深まり

同時に、自分を他のメンバーと対比的に捉える目は、自己認識を深めるものでもある。それは、Hの「自分は、グループの中でKを通して自分を見つめる目が出てきた。自分はKと対比的な意味で、自分は実感に乏しい人間だというのが、始めて出てきた。アイデアの世界ではなく、現実の世界で自分のまわりの人間と赤裸々に接して行く。そこで赤裸々な感情を自分のものとしていく。それが、これから先の俺のやることだ」という core が、できている」という言葉やGの「自分と他のメンバーとの比較の中で、自分を客観視できるようになるのではないか、その出来ない自分にとってやらねばならない必要な作業だ」という言葉の中にはっきりとうかがわれる。

③ 他者へ向う目

こうした対比的な捉え方、感じ方は、自己へ向う目だけではなく、同時に他者へ向う目、いわば視野の拡がりをも促している。それは、例えば、Aの「自分とは異質な感じ方、考え方がある。その人なりの方向性があるんだ」という他者への認識の拡がりとうした自分とは異質な他者への受け入れという形で生じてくるのである。いわば、自分と他者との同質性及び異質性の確認及び、自己認識の深まりという内的作業を通して必然的に他者への認識の拡がりとう深まりが促され、同時にそれが自分へ再度引き戻されて、自己及び自己の進路選択広くは進路問題そのものへの認識を深めるという形で循環されているのである。このことは、上述したHの「Kを通して自分を見つめる目」という言葉や、Kの「自分とGとの相違は、比較土壌学という言い方からすると、Gは酸性—自分は温性という感じ。Gにとって、対親との関係の中で、四苦八苦してきたのだろうが、自分の場合、親との対応の仕方とか葛藤とか出てこない。確かに過去を振り返ってみると、土壌みたいなものが。Gの土壌によって、今迄自分が気がつかなかった土壌みたいなものを知り得たのは確しか」、「ただ、自分にとって、親との間に色々接触があったわけだが、どこかぼやけてしまう。Gと比較する場合、それをきわだたせなくてはならなくなる」という言葉に端的に示されている。

④ 内的バランス 新しい洞察の展開

上述した様に自分と他のメンバーとの異質性及び同質

性の確認や、それに促かされて生じる他者へ向う目の拡がりとう自分への引き戻し、それが更に自己認識を深めていくという循環は、メンバーにとって、たとえば「彼は親に対して、あのような積極的肯定的で温いとらえ方ができるのに、自分にはどうしてそれができなかったのだろう」という、自分の片よりやこだわりを再びみつめなおす契機となる。後にのべる事例Lの場合、親との関係の中での親に対する「ル・サンチマン的な感じ方」が彼の核的要因に色濃く反映しており、進路選択はいわばその感じ方の一つの側面であったのだが、同時に選択はそれからの回復の過程という意味をもっていたとの認識があらわれる。その際にKの「温性的」ともいえる親に対する感じが影響を与えるのである。親に対して今まで充分見ることのできなかった肯定的な見方の萌芽が生れ、進路選択は、親からうけつがれ、譲りうけたものに大きく影響されていると認識されてくる。これは、個人の進路決定にあずかる内的な要因の働きについての、その個人の捉え方の変化の一つの例を示すものである。そして、この捉え方の変化は、グループメンバー間の働きかけを通じて、個人内の要因についてのバランスのとれた認識となって結晶する。このバランスのある認識は、たとえば、グループ討議を経たあとでのGの現在の自分の受容の過程にもあらわれてくる。(事例参照) このように進路選択にあづかっていた否定的・肯定的な両面の自己のとりえ方が、自己と他人との対比、共通な認識の発生、グループ内のその他さまざまなダイナミックな相互過程を通じて明らかにされてきたといえる。

[3] 事例研究

事例1 L君の場合

L君はある教員養成大学から転学して、そのコースを変え現在相談活動に従事している。

教員養成大学に進学したことには、高校の教師に「お前は教師向き」と言われたこと、経済的な事情で国立大学へ行く必要があったこと、「人を求める気持があって、教師も悪くないなと思った」ことなどが関係しているとL君は言う。その後、勉学のコースを変え現在に至るわけだが、この間彼の「人を求める気持」をめぐる思いは、彼にとって中心的なテーマであったようだ。彼の進路選択には、「はぐくみ、いつくしみ、育てる」ことに関心があったことが関係する他、両親との間で生じた「渇き」あるいは「充されなさ」が色濃く影をおとしている。弟が生れて、両親の関心が自分から弟に移ってしまったこと、しばらく母の実家にあずけられたこと、その時感じ

た言いようもないさびしさが、鮮烈な記憶となって彼の中に残っている。自分が両親にとって意味ある存在と認められているんだろうかというに近い思いが意識から離れなくなったようだ。それがさらに、普遍化されて、自分は意味ある存在だろうか、自分は必要とされる人間だろうかという問いかけになっていった。

紆余曲折を経た後、彼の現在の方向を決定したのは、K研究所における、子ども達との出会いであった。自己の「空白感」を充たすものを求めてきた彼は、「はじめて子ども達と遊べた時の、あの充された感じがまだ体の中に残っている」と言う。その後、大学闘争とのかかわりを通して、それまで彼の中にあった自己へ向う肥大した指向（例えば、自分にとっての充実感）の中での息苦しさからの「解き放し」が生じてきた。社会的存在としての自分が意識されてきた。自分の生き方や将来の職業の選択として、自分の中に芽生え始めたものを社会的視点（それも非常に観念的な）でとらえかえすという統合化へ向う時の大きな揺れ動きの時期であったようだ。大学闘争を通して急激に肥大した、外へ向う目は、現実心障児やその親との交流、保健所での心障児のグループ等の体験を通して、現実味を帯び、彼の中でのバランスがとれてきたようだ。彼は、この間に「こんな自分で十分やっていける。理論武装したり（理論に）しがみついたりしなくてもやっていける」と感じるようになった。そう感じるには数年の活動が必要だった。

彼は「自分にとってのコアと言うか、ベース・トーンのような形で、親に対するある種の被害意識、親に対するネガティブ・イメージのような感じがあった」と言う。だがグループメンバーの一員が父親に対して抱いている「温性」というイメージ、またその彼が感じている、父親から自分へと脈々と伝わってきている、ある流れの感覚に接した。それはL君の中に波紋を投げかけた。そして半年ほどの間に、自分の中で親の存在が相対的に小さくなっていくのを感じ、また、親に対する温かい思いもわいてくるようになった。その中で「母親の、人につくす面とか、親父の、人に頼まれると引き受けて一生懸命やるという感じが見えてきて、そういう、人につくすとか頼まれたことをやるとか、そんな面をものすごく譲り受けている感じがし始め」てきた。

彼にとっては「他人に認められる存在とか、意味のある存在とか、必要とされる存在とかが、コアに近いもの」であり、かつてはそのコアは親に対するネガティブな見方と結びついていた。が、現在は逆の、親に対するポジティブな見方、感じ方とも結びつきつつあると言えるようだ。

L君の話には、次のA君のような「社会的に、価値があると認められている仕事」という発想は出てこない。彼にはもっと個人的な感覚の方が大切なようだ。自己にそぐわない場所、物足なさや息苦しさをを感じる場所を避け、自分が居やすい場所、充される場所、他者との関係で自己の存在感を感じられる場所、そういった居所をL君は探し求めてきたと言えるのではないか。

彼は現在「人との関わりを軸とした職業だったら何でもいい。そんなところだったら生きていける」と言う。

事例2 A君の場合

A君は「今まで挫折らしい挫折をしたことがない」と言う。高校までトップクラスの成績であり、学校全体が理科系指向の傾向がある中で、ノーベル物理学賞、フィールズ賞などのニュースに感じ、漠然と理科系の分野に憧れを抱いていた。理科系に進学してからは数学などがむづかしくまた興味がわかなかった。それで文科に変更しようと思ったが、その時、文科系で一番脚光をあびている、自然科学的な方法を使える、という理由で心理学を専攻した。もちろんやりたいことをやりたいという意識もあった。心理学の中でも臨床心理学のように「ドロドロやっているのはどうもという感じがあった。」理科学的な手法を使うことに価値を置いていた。現在は心理測定を研究している。

彼の進路選択の話の中には、身近な人の影響、他者との個人的な関係、家庭内外の風土といったテーマはほとんど入っていない。また自己の内部での深刻な悩みに言及することも少ない。彼は「やりたいものをやりたいと思って探してはいたし、これというテーマでは悩んでいなかったが、生き方ということでは悩んでいた」と言う。しかしその「生き方」の内容についてはあまり語らず、「生き方」を正面から見すえる形で進路選択は行なわれなかったことがうかがえる。

進路グループに出席して他の出席者の話をきき、彼は「へーそんなことを考える人がいるのか」と感じ、「それほど深刻に考えなくてもいいんじゃないか、もう少し楽に考えてもいいんじゃないかと思った。」A君にとっては、他者あるいは他者ともはっきりしない何かや、自己との生々しい葛藤を続けながら、その葛藤の中から進路を選択していくことが、別世界の出来事のように感じられたようだ。彼はそう感じると同時に「進路選択というのは、A、B、C、D、E、と進路があって、その中のどれを選べば良いかということではないようだ」と思いはじめた。

彼にとっては仕事とは価値のあるものでなくてはならず、その価値とは「人間の問題を解決していくのに一番

いい」ということの他に、名誉や権威と密接にかかわっているものようだ。社会的に価値があると認められている仕事ないしは職業、そういったものの中からいずれかを選んでいくというのが彼の進路選択であったようだ。「何らかの形でトップクラスの中で走っていかなければ幸せと言える状態にならないのではないかと考えていたし、皆がそれを目標にしていると思っていた。世間で良いと言われる職業につきたかった」と彼は言う。ピラミッドの頂上を目ざして上昇していこうとする姿勢が強かったようだ。

ここ数年で、彼の進路選択に対する考え方は変化したと彼は言う。もっとも大きな変化は、社会的に価値ある仕事と認められなくても当人がやりがいを感じ、その仕事を面白いと思い、一生懸命やっていけばそれで良いのではないかと考えるようになったことだ。価値はその本人が認めていればそれで十分であり、何が幸せかは本人にとってみなければわからないと今は考えている。また具体的な仕事としては「ドロドロした現実とつきあっていく泥くさい仕事をやっていかないと、人間理解と言うか、社会に役立つ学問はできていないだろうと感じ出した」が彼自身は特に方向を変えたわけではなく、今やっていることを進めていくことが「人間の問題を解決していくのに一番いい」と思っている。

A君は自己の外に存在する（あるいは存在すると思われる）価値体系を承認し、その価値体系が最も価値があると認める職業、仕事は何か、それに至る道は何かという問題意識で進路を選択してきたようだ。自己の関心や興味はもちろんその選択にかかわりを持っているが、A君の場合、その関心や興味が、自己のどういう部分から派生してきたのかは不明確であり、ア・プリオリに存在していたとさえ感じられるほどである。そういう在り方がA君らしいところのようだ。彼の関心や興味そのものが社会的な価値体系の直接的な反映であるとも言えるのではないだろうか。「自分なりの（価値観の）消化をしているつもり」と彼は言うが、彼は関心や興味と自己との関係そのものには立ち入ろうとはしない。

彼は今「人間に役立つこと」の内容に立ち入るよりも「自分がやりたいと思うことを一生懸命やっていく」ことに関心がある。

事例3 G君の場合

G君はX大学法学部に入学し、司法試験を目ざしたが、はたさず、就職しないまま、友人の働いている障害児のためのY学園に出入りするようになり、現在はZ大学で教育学を学びながら、Y学園の常勤職員として働いている。

彼にとって「家はあっても『家庭』はなかった。」父親は労働運動にたずさわり、家庭をかえりみず、家計は母親が支えていた。彼をはぐくんだ土壌は「酸性」だったと言う。理想主義的な父親に対抗して母親は大学から大学院に進み挫折した。その間、彼女はG君に多大の期待を抱くようになった。G君は両親に「圧殺されそうな」感じを抱き、所属感のなさ、孤立感を味わった。父母の相克の谷間でバランスをとろうとして右往左往していた。「身の置き所のない部分を持ってきてしまったのがいたたまれない」と彼は言う。

彼の進路選択は、自分を押しつぶそうとする何かから逃げ、どこかに帰属しようとする行為だったように思える。その「何か」とは必ずしも両親ないしは両親の期待など具体的なものとは限らないようだ。必ずしも「就職から逃げて司法試験を受け」「司法試験から逃げてY学園に行った」のではないようだ。進路について彼が語る言葉の奥に、もっと切実な彼の叫びがひそんでいるようなニュアンスを感じる。彼は自己を色々な言葉で語るが、否定的な言い方になることが多い。「(両親に) がんじがらめにしばられて、自分を客観的にとらえるだけの根がなかった。」「人生経験が狭くて、サラリーマンになったらどういう仕事をするのかということさえわからない。」「自分で自分を大事にしようとか、社会的に広がりのある見方が出来ない。」等々。そして彼は「自分を認め、評価してくれそうな人に対して、どこかでサッとよけている」とさえ言う。自己をめぐるそのような思い、それにまつわってついてくる整理しきれない雑多な感慨、そういったものから彼は逃げようとしてきたのではないだろうか。

G君にとって進路選択という言葉はなじまない言葉のようだ。Y学園で自閉症児と言われる子ども達に会った時彼はホッとした。大人と子どもという別世界の立場にいたのであってそこでそれまで避けてきた人間のつきあいが出来るような気がした。過去を振り切ろうとし、がんじがらめの自分をなんとか解き放とうとするために、さまざまな場所に自分を置いていく。そんな風に生きていくことを「進路」と言って良いならどこかホッとすることがする、と現在の彼は言う。「家庭にこだわるのは、家庭の優しさを享受して来れなかった寂しさを持っていて、それ以外の、人の地位、金、頭の良さなどは無意味に近い。人の一生にとって一時でも生きていて良かったと思えるような人との触れあいがほしい」と彼が言い、そういう「生きていて良かった」と思える時間と場所を求めて生き続ける時、G君にとって「進路」とは、生き続ける、その生き方（彼は「生きざま」と言う）そ

のもののようだ。

彼は現在「同じところを考えていたって仕方がない」と思い始めている。自分はダメな人間で、親の影響下でしか生きられなかったが、そこを切って生きなければならない、自分で歩くしかない、と考えはじめている。彼は他方こう言う。「こんな俺でもいいんだなあ。まあ俺はこんなところか。」自分への否定的なイメージや両親との葛藤へのこだわりからG君が、少しずつ離れつつあることが、彼の言葉からうかがえる。彼はもう闇雲に逃げないかも知れない。

事例4 Iさんの場合

彼女はP大学で心理学を専攻した後、数年間高校の教師を勤め、その後Q高校のスクールカウンセラーとして仕事を続けている。

心理学を専攻した理由を、彼女は今、かなり明確に言うことができる。彼女は小さい時から、かわいそうだと感ずる人、気の毒に思われる事情にある人に関心があり、同情心を強く持っていた。言わば社会福祉的な仕事に将来携わろうという希望は小学校の頃より芽ばえていた。その希望は小学校の教師との関係を通じて、教師になろうという希望をも含むようになっていた。これには学校が彼女にとって自宅と比べて居心地の良い場所であり「学校ほど楽しいところはなく、私の天下」だったことも大きな原因と言える。

父親は彼女に男児として生れてくることを期待し、自分のはたせなかった医師になってくれることを望んでいた。そういう父親の、貧しい恵まれない人々へのおもいやりが、彼女の同情心に影響を与えていたようだ。また、小学校時代通っていた、キリスト教の教会での見聞や活動も無視できない。そういう環境の中で、「偉い人間になれ」という言葉が内在化していった。その時「偉い人」とは「めぐまれない、かわいそうな人々に、手をさしのべる人」のことであった。

他方、大家族の中でIさんは、自分が存在することへの後めたさ、ひけめ、を感じ、それが、自分の存在を肯定してしっかり受けとめてくれる人や場所がほしいという思いになっていったようだ。「こちらの言ったことをちゃんと受けとめてくれる人がいない。ちゃんと知ってもらいたい。ひとりでなくなりたいという気持ちがずっとあるように思う」と彼女は言う。そう願ひ、もがくなかで自分を含む人間の不可解さへの関心が生じてきたようだ。

Iさんは最近こう言う。「居心地の悪い思いで生きている人への同情などが、私の優しさから出て来ているというより、同病相哀れむという意味の方が強かったので

はないかということを発見した。」順番から言えば男として生れてくるはずだったのに女として生れてきたことを出発点として「4年生位までこれが自分の父、母という感じを持てなかった」こと、「本来わたしは、いなくともいい人間なのだがたまたまそこに居させてもらっているんだっていう気がずっとあるように思えてきた」ことなど、彼女が自己の存在に不安定感を抱いてきたという感想は、彼女が今までの生き方をふりかえる時、再三に渡って述べられるテーマである。

彼女は一年間のつもりで社会科の教師になった。その彼女が、生徒に接するうちに生徒への関心を深め、さらに生徒が生き生きしている瞬間とげんやりしている瞬間とのギャップなど生徒の心情的な問題に注目していったこともこの自己や他者の存在への関心と切り離しては考えられない。

Iさんは「今までは自分のこれまでの生いたち、生活を否定的に見てきたが、少しずつ肯定的に見られるようになってきた。どの人にもそれぞれの悲しみや重荷があり、そこに生いたってしまった自分の存在が現実にある。これをどう生かすか、それは、自分がやっていけばいいことであって、過去をとにかく言っても仕方がないと思う」と言う。ややもすると後向きの姿勢をとりがちだったIさんは、一歩前にふみ出したのではないかな。

また彼女は同時に「自分の存在が、もっとはるか前から流れて来ている人間の営みの流れであるという確認を得た」とも言う。彼女は、長い視点から自己をとらえ直す作業の中で、自分の存在しにくさに新しい光をあてはじめていたようだ。

〔4〕 まとめ

1, 任意に参加した大学生、社会人などの20才から30才台の5名乃至8名ほどのメンバーで、18回にわたるグループ討論が行なわれ、その過程で、個々人の進路選択の過程、選択に関連する諸要因の検討がなされた。

2, グループメンバーの相互交流を通じて、選択にかかわる外的環境的要因、内的個人的要因、特に後者の核になる要因、それらを育てる土壌となる要因、個人にとって大きな選択を迫る Critical point (Turning point) などが明らかにされた。それらの生れる相互関係また生活史における時期的な意味もまた検討された。

3, このような各要因が個人ごとにどのようにゆらいているかによって、大きく四つの型に分つことができる。外在価値志向型、外的条件型、核的要因型、葛藤型のそれぞれである。他の個人は、これらの諸要因の組み合わせ

として理解できる。

4, このような要因が分離され確定されてくる過程が, グループ討論の過程を追って分析された。第一期, 外的要因を個々に探索する時期。第二期, 要素的探索から, 個々人の「生きざま」に焦点があわされて行った時期。第三期, 進路選択の問題からはなれて, 後の発展の萌芽となった, 現在の関心事について語り, グループとしての凝集をつよめた時期。第四期, 選択の核的要因, 及び核と外在的要因の統合をみる turning point が明確に意識されてくる時期。第五期, 土壌について語られ, 今までの欠如感を中心とした核の意識から, 個人の内的一相

貌的世界全体の把握に自然に展開して行った時期, が区別された。

5, そしてこのような進路選択についての認識の展開, 個人にとっての洞察の発展は, グループの力学によっている。その主たる寄与は, 話しあいを通じての自分と他人の「異質性及び共通性の確認」であり, 自己の認識の深まりと共に生ずる, 「選択要因間のバランスのとれた捉えなおし」であった。

6, 最後に, 以上の選択的要因のもつ個人的意味を, 4例の事例研究を通じて例示した。